

船井情報科学振興財団 留学生レポート

2018年6月

澤田 真行

早いもので留学生活も終わりが近づいてきました。五年目が終わりました、Yale 経済学部
の澤田です。来年はついに就職活動の年ということで、この夏は博論の仕上げに追い込ま
れています。

■就職活動について 経済学 PhD の就職活動は非常に中央集権化が進んだものとなってい
ます。毎年年末年始にアメリカで開催される AEA annual meeting の会場周辺でひたすら
インタビューを行い、インタビューの結果次第で各地に発表に呼ばれ、採用に至るとい
うプロセスが基本となっています。

今年は一月四日から六日まで、アトランタで執り行われるようです。ホテルの確保の都合
だそうですが、冬真っ只中にシカゴやらボストンやらで執り行われることも少なくない学
会なので今回南部なのはありがたい限りです。(極寒地で執り行われる年には大雪が重な
ったりで大混乱となることも少なくないようです。)

就職活動に際して先月ごろオリエンテーションがあったところなのですが、応募書類の作
成からインタビュー練習までしながら軍隊のブートキャンプのようなスケジュールで鍛
え上げられる予定で、(多少時代遅れなのでは、という話も聞かなくはないですが)心強
い限りです。こちらについては体験談として次回の報告書でお伝えできればと考えてい
ます。

■研究の進捗について 一年前にお伝えした伊神教授との共同研究が再投稿段階に至りま
して、近日中にジャーナルへ投稿する予定です。以前からワーキングペーパーとして以下
に https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=2695933 に公開している
ものですが、現在のバージョンからいくつか追加分析をするなど大幅に改訂を行いました。
2000年代の中国企業のデータに着目し、私企業は国営企業に比べて生産的だと言われる
がそれは本当なのか、この時期に多く行われた国営企業の民営化は生産性を高めたのか、
という問いに答える論文となっています。私は Gandhi, Navarro and Rivers (2017) とい
う生産関数のノンパラメトリック推定手法を拡張し、民営であること及び民営化のリター
ンを識別・推定するプロセスを担当しました。企業の所有権(民営であるか国営であるか)
を企業または中国政府が内生的に選択する離散投入変数とみなすことを許すモデルを推定
することで、それらの変化がランダムに生じているとしてきた既存研究ら (Brandt, Van
Biesebroeck, and Zhang, 2012 及び Hsieh and Song 2016) に比べよりロバストな結果が提
示できています。

私個人の博論は変わらずプログラム評価の手法開発を行っています。特定の社会政策の
実施においてランダム化実験による評価を行う試みは実際的にも広まってきているところ
ですが、ランダム化のみでは得られない情報というのもプログラム評価において重要な位置
を占めています。私の研究ではプログラムの効果の被験者間における異質性に着目した手

法を考えています。実際に応用として用いている例として開発経済学で長く分析されてきたマイクロクレジットの効果検証を考えています。これらの分析では無作為に割り当てたトリートメント地域にのみマイクロクレジット会社の参入を許すという実験を行っており、取りあげているメキシコを舞台にした実験 (Angelucci, Karlan and Zimman, 2015) ではマイクロクレジットがターゲットとしている小規模ビジネスの収入を有意に引き上げることがわかっています。しかしながら、マイクロクレジットのアクセスを無作為に与えることはできても実際にマイクロクレジットを利用するかは地域の個人次第であり、「実際にマイクロクレジットを利用した個人が成功したかどうか」を無作為割り当てのみによって知ることはできません。さらに、この類の実験は個人単位ではなく集落単位で無作為割り当てを行うため、利用していない個人への外部性の可能性が指摘されており、「マイクロクレジットを利用していない個人は何らかの影響をうけているのか？」という点にも焦点がおかれています。こちらの問いにもランダム化のみでは答えることができず、何らかの追加仮定を必要とします。特に上記のような外部性が生じている場合、通常行われる割り当て変数を操作変数とみなす手法 (Angrist, Imbens and Rubin, 1996 など) を用いることができず、代替的な手法を提示する必要性がありました。私の研究では「マイクロクレジットの利用」などの割り当て後に決定される変数が内生変数であることを許せる識別仮定を導入し、そのような内生変数についてプログラムの効果の異質性がいかようであるかを分析しています。

■終わりに 毎年夏の報告で「次こそは」と書いているように思いますが、今年は学内の発表とその直後の京都での発表にちょうど重なってしまい、またもや参加できないことになってしまいました。みなさまとは長らく顔を合わせておりませんが、どうぞ変わらずご自愛ください。

■参考文献 Angelucci, M., D. Karlan, and J. Zinman (2015): “Microcredit Impacts: Evidence from a Randomized Microcredit Program Placement Experiment by Compartamos Banco.” *American Economic Journal: Applied Economics*.

Angrist, J. D., G. W. Imbens, and D. B. Rubin (1996): “Identification of causal effects using instrumental variables.” *Journal of the American Statistical Association*, 91, 444-455.

Brandt, Loren, Johannes Van Biesebroeck, and Yifan Zhang. 2012. “Creative accounting or creative destruction? Firm-level productivity growth in Chinese manufacturing.” *Journal of Development Economics*, 97 (2): 339-51.

Hsieh, Chang-Tai, and Zheng Michael Song. 2015. “Grasp the large, let go of the small: the transformation of the state sector in China.” Working paper No. w21006. National Bureau of Economic Research.

Gandhi, Amit, Salvador Navarro, and David Rivers. 2017. “On the Identification of Gross Output Production Functions”, Working paper, University of Wisconsin Madison.

澤田 真行